

政策提案特別委員会記録

令和6年4月15日

【開催日】 令和6年4月15日（月）

【開催場所】 第1委員会室

【開会・散会時間】 午後1時30分～午後3時3分

【出席委員】

委員長	大井 淳一朗	副委員長	中岡 英二
委員	伊場 勇	委員	笹木 慶之
委員	山田 伸幸	委員	吉永 美子

【欠席委員】

なし

【委員外出席議員等】

議長	高松 秀樹		
----	-------	--	--

【執行部出席者】

副市長	古川 博三	企画部長	和西 禎行
企画課長	工藤 歩	企画課主幹	大坪 政通
企画課参事兼大学連携室長	大谷 剛士		

【事務局出席者】

局長	石田 隆	局次長	中村 潤之介
議事係長	岡田 靖仁		

【審査内容】

- 1 山口東京理科大学との連携について
- 2 今後の進め方について
- 3 その他

午後1時30分 開会

大井淳一朗委員長 ただいまより、政策提案特別委員会を開会します。お手元にあります付議事項に従って進めてまいりますので、委員会運営に御協力のほどよろしくお願いいたします。まず付議事項1点目、山口東京理科大

学との連携についてです。当委員会は9月の政策提案に向けているところですが、山陽小野田市に住みたい、住み続けたいと思ってもらえるようなまちにしようということの一つのあるべき姿にして、テーマを三つほど挙げております。その中の一つとしまして、山口東京理科大学との連携ということです。そのためには、まずは本市の状況について知りたいたいと思ひまして、今日はお忙しい中、担当課に来ていただきました。まずは、山口東京理科大学の今の状況、学生がどこから来ているとか就職の状況とかについてお伺いして、各委員から質疑を受ける形としたいと思ひますので、よろしくお願いします。それでは担当課、よろしくお願いします。

工藤企画課長 昨年度まで、理科大関連事案につきましては大学推進室を担当部署として対応してまいったところですが、今年度の組織変更によりまして、大学連携室が企画課内に設置されましたことから、大学関連につきまして、当課より御説明します。本日、資料の1から5及び理科大のキャンパスガイドをそれぞれデータと紙で配付しております。本日の付議事項は、山口東京理科大学との連携状況についてと伺っておりますので、まずは足元の現状について御説明させていただきます。資料の説明を簡単にします。資料1から3までは、学生の出身都道府県と卒業後の進路に関する資料、資料4は大学が独自に行われている学生生活アンケートの回答内容に関する資料、最後に資料5としまして、市と理科大の間で令和6年度に取り組む予定としています連携事業に関する内容を整理しております。資料1から3までについては、関連がありますので一括説明の上で質疑、資料4と5につきましては、それぞれ資料説明の後に個別の質疑といった流れを想定しておりますが、説明についてはいかがでしょうか。（発言する者あり）ありがとうございます。それでは早速ですけれども、資料1から御説明します。

大谷企画課参事兼大学連携室長 それでは、資料1から資料3までにに基づき、学生の出身都道府県と卒業後の進路につきまして御説明させていただきます

ます。まず、学生の出身都道府県状況につきまして御説明しますので、資料1を御覧ください。公立化後の平成28年度から令和6年度までの学部入学者の状況を記載しております。出身都道府県の状況につきましては、各年度で若干のばらつきはありますが、山口県からの入学者が最も多く、約30%近くを占めています。次いで福岡県が15%前後、続いて広島県、大分県が7%前後となっています。また、地方別に見てみると、中国地方が40%前後、九州・沖縄地方が35%前後、四国地方と近畿地方を合わせて15%程度となっており、西日本からの入学者が約90%を占めています。資料2につきましては、工学部と薬学部の入学者の状況を記載しております。山口県からの入学者の状況につきましては、工学部につきましては25%前後、薬学部につきましては30%前後となっています。続いて、学部卒業者の就職状況につきまして御説明しますので、資料3を御覧ください。就職率につきましては、公立化の前年度から令和5年度までの状況を記載しております。就職率は98%前後となっており、県内への就職率につきましては30%前後となっており、市内への就職率につきましては5%前後となっており、初めて卒業生がありました薬学部につきましては約20%となっており、市内への就職率につきましては5%前後となっており、市内への就職率は、先ほど、学部入学者の出身都道府県の状況について御説明しましたが、工学部につきましては、山口県内からの入学者と山口県内に就職される卒業生の割合がほぼ同程度となっておりますが、薬学部につきましては、山口県内に就職される卒業生が若干少ない状況となっています。ちなみに、全国の公立大学が加盟しております一般社団法人公立大学協会がまとめた資料によりますと、公立大学全体の状況としましては、公立大学の入学者に占める域内者の割合は40%弱となっています。なお、その内訳は、都道府県立が50%前後、市立・組合立等が20%前後となっています。また、大学所在地と同一の都道府県・市内への就職率は、おおむね45%前後で推移しています。私からは以上です。

大井淳一郎委員長 資料1から3までの説明がありました。これにつ

いて、皆さんから質疑を受けたいと思います。その際は、この資料のこの部分というように、きちんと指摘してください。

山田伸幸委員 先日、報道で見たんですけど、薬学部の卒業生の県内と市内への就職状況では、病院が非常に多くて企業が少ないというのがあったと思います。実際のところどうなのでしょう。

大谷企画課参事兼大学連携室長 大学でも分析しておられます。ただ、このたびの卒業生につきましては第1期の卒業生ということで、OBやOGがいない中での就職活動ということもありましたので、企業等の割合が若干低かった状況かもしれません。全国的に見ると、企業はもう少し上がりますが、病院や薬局が多いのは同様の傾向であると認識しております。

山田伸幸委員 県内市内の研究機関もしくは企業に就職していただく比率が高くなれば、当然、県内だけじゃなくて県外から来られた方が、県内もしくは市内に残られる状況になっていくと思うんです。企業に対する就職のニーズはどうだったのでしょうか。分かればお答えください。

大谷企画課参事兼大学連携室長 全体的な詳細につきましてはまだ把握しておりませんが、市内や県内の企業への就職活動につきましては、薬学部であれば3年時ぐらいからインターンシップ等で積極的に活動されておるとお聞きしております。今後、さらに、今度は大学だけではなく市も一緒になって、市内や県内の企業や病院等に就職できるように、積極的に連携を図ってまいりたいと考えております。

伊場勇委員 まず、入学のことについてです。令和6年度の数字も出していますが、工学部と薬学部に市内から何名ぐらいの方が入学されているのか。数字と傾向があれば教えていただきたいと思います。

大谷企画課参事兼大学連携室長 県内の状況については数値が出ているんです

が、市内についてはまだ把握しておりません。今後の入学者の状況につきましては、大学もしっかりと市内や県内からの入学者の増加を図っていきたいと考えておられると思いますので、私どもも資料を把握して、一緒に考えていきたいと思っております。

伊場勇委員 大学が市内にあって、大学も今から地域連携をしっかりやっていくということで、中学校から高校に至るまで関わり合いがあると思うんですよ。あそこの大学に行ってみたいとか、将来の夢につながるとか、そういうきっかけになる大学が近くにあるわけで、市内から山口東京理科大学に行くことを促していくこともまちづくりの一環になるのかなと思うんですけれども、指定校といったところではどういう取組をされているのか、教えていただけますか。

大坪企画課主幹 指定校推薦については、今日お配りしております「キャンパスライフ」に掲載しております。キャンパスライフの89ページに、2023年度の実績が出ております。今、一般選抜と学校型選抜、大きくはこの二つを行っておりまして、学校型選抜におきまして一般推薦の県内枠と全国枠、指定校推薦が行われているという状況です。

山田伸幸委員 公立となって以降、工学部も含めてレベルが非常に高いという言い方がされているんですけど、実際のところ難関校でしょうか、どうなんでしょうか。

古川副市長 先ほどの指定校推薦等の関係についてですが、市内の高校で指定校推薦の枠があります。また、県内の高校でも指定校推薦があります。そうした中で、県内の入学者がそのような数字になっておることです。また、偏差値の問題ですが、やはり公立になりまして、工学部関係は山口大学工学部と同じような偏差値、また、薬学部については中期日程ということもありまして、岐阜薬科大学とか静岡県立大学とか名古屋市立大学とかと同じような偏差値62前後を保っておりますので、あ

る程度、難しい、偏差値の高い、いい大学になってきておると理解しております。

伊場勇委員 指定校推薦を使う学校名は、具体的に教えられますか。無理ですか。

大谷企画課参事兼大学連携室長 大学側で公表されておられませんので、できません。

大井淳一郎委員長 指定校が何校かありますけれども、確実にこの学生を推薦しますというのはあるんですかね。さっき89ページでいうと、薬学部は7人ということなんですが——そうかこれは募集で、志願者が7人ですね。だから、募集が8人ということは、8人が指定校ということですよ。そのうち7人が手を挙げて、合格された人が7人と。そういう見方ですかね。見方というか状況についてお答えください。

大坪企画課主幹 言われたとおり、募集8人に対して志願者が7人、受験者が7人で、合格者が7人ということです。

大井淳一郎委員長 あくまでも募集人員と指定校の数が一緒ということですね。ほかの学部も大体そのように理解してよろしいですか。

大坪企画課主幹 この8人が各学校1人かどうかは、こちらも把握しておりません。

中岡英二副委員長 89ページに2023年度の選抜結果とありますが、工学部と薬学部の志願者倍率は、過去5年間でどのように推移していますか。

大坪企画課主幹 過去5年間の志願倍率ということですか。（「はい」と呼ぶ者あり）学校推薦の志願倍率はまとめておりませんが、一般選抜の倍率

はまとめております。令和元年度から御説明しますと、令和元年度は工学部が10.9倍、薬学部が11.9倍です。令和2年度は工学部が15.0倍、薬学部が12.2倍です。令和3年度は工学部が10.7倍、薬学部が9.7倍です。令和4年度は工学部が15.3倍、薬学部が13.4倍です。令和5年度は工学部が10.9倍、薬学部が14.1倍となっております。

中岡英二副委員長 国家試験の合格率もよかったということで、今後、薬学部の倍率もかなり上がってくると予想されますが、今後、定員をこれ以上増やすことはないんですか。

大坪企画課主幹 今のところ、定員が増えるというお話は伺っておりません。

大井淳一郎委員長 よろしいですか。89ページの中でありますか。なければほかのところに移りますね。（うなずく者あり）山田委員、先ほど手を挙げていたので、どうぞ。

山田伸幸委員 問題は、倍率がそうであっても、実際には受けられない方が随分おられるんじゃないかと思うんです。受験日程で影響が出てくるんじゃないかなと思うんですけれど、山陽小野田市の位置的な状況で諦めるというようなことがないか、もし何か分かっていたらお答えいただきたいです。

古川副市長 位置的なもので受験をしないということは、まずないと思います。本来、何を学びたいかで大学を選びますので、そういうことはないと思います。また、出願して実際に受けなくても、受験料は全部入りますので、何ら問題ありませんし、一番大事なのは、定員の確保であり、最大の目途になろうかと思います。

吉永美子委員 キャンパスガイドの中の54ページにある、教員になろうとす

る人たちも応援されているというところなんですけども、資料3の就職というところには、いわゆる学校教員採用試験を受けて合格した人たちも入っているんでしょうか。教員になられる状況を教えてください。

大坪企画課主幹 こちらの就職者の中には、教員の資格を取られて教員になられた方も含まれております。ただ、この中で教員が何名かという資料はありません。申し訳ありません。

吉永美子委員 大学を応援する側の立場としてなので、答弁がなかなか苦しいかもしれませんが、市からは、教員を目指そうという人たちを大学がどのように支援されているように見えますか。支援体制とあるので、状況の分かる部分があったら教えてください。

古川副市長 大学側のキャリアセンターから聞いておるところによりますと、大学としましては、公務員や学校の先生、工学部ですと工業高校の先生とか中学校の理科の先生とかの資格が取れるようですので、その辺の支援はやっておると。そうした中で、やはり、公務員関係の就職も少しずつ増えていくというのは、学校の出口論からすればいいことなんで、その辺の支援もしておるとは聞いております。

山田伸幸委員 89ページの表を見ながら言っているんですけど、合格者がそのまま入学者になっていないというのは、どういった理由があるんですか。ほかの大学に行かれたというのがあるかと思うんですけど、少し差があるのかなと感じました。どうでしょうか。

大谷企画課参事兼大学連携室長 山田委員が言われたとおり、他大学への進学が一番大きなものであらうと思っております。ただ、これは山口東京理科大学に限ってではなくて、他大学でも当然、合格された方が入学されるかというのは、割合は違いますが同様な傾向があらうかと思います。

伊場勇委員 それでは、就職についてです。まずは工学部ですけど、入学されて、大体3割の方が県内に就職しているという状況ですよね。その内訳といいますか、よそから大学に来て、県内に就職している、逆に、県内の学生が山口東京理科大学に行って、県外に就職される。その辺って御存じですか。

大谷企画課参事兼大学連携室長 すみません、このたびの資料の作成に当たりましては、そこまで大学に確認しておりませんでした。今後、就職のことについて、連携していく上では、そういった数字がどうしても必要になってこようかと思いますので、大学と精査してまいりたいと考えております。

大井淳一郎委員長 そのほか、皆さん、資料1から3までで、よろしいですか。
(うなづく者あり) それでは、資料4以降について、大坪主幹、説明をお願いします。

大坪企画課主幹 それでは、大学が実施しています学生生活アンケートについて説明しますので、資料4を御覧ください。このアンケート調査は、大学院生を含む全ての学生を対象に大学が実施しており、この調査を通じて大学生生活全体への満足度を測定し、その結果を教育・研究環境の改善に活用しています。質問項目は、学生の生活実態に関するものから、学生生活の満足度や、大学が今後改善すべき点を明らかにするための質問が設定されています。続いて、2には、令和4年度のアンケート調査の結果から、「学生の満足度」、「大学の魅力になっていないもの」、「改善が必要だと思うもの」について掲載しています。1ページ目の学生の満足度は、平成30年度から令和4年度までの5年間の推移を掲載しており、令和4年度では「とても満足している」と「まあ満足している」の合計が76.8%、「あまり満足していない」と「まったく満足していない」の合計が23.2%となっています。続いて、2ページ、大学の魅力になっていないもの、改善が必要だと思うものについての結果は、

「学食・売店の充実について」が最もポイントが高く、続いて「クラブ・サークル活動」、「キャンパス環境の良さ」の順でポイントが高い結果となっています。説明は以上です。

大井淳一郎委員長 資料4、学生生活アンケートについてです。

山田伸幸委員 資料4の2ページ目で、魅力として当てはまらないもの、改善が必要と思うものを見て、学食・売店の充実とありました。僕たちが行くことはそれほどないんですけど、一番比率が高いということは、何か具体的にこういったことというのが挙がっているんでしょうか。

大坪企画課主幹 この内容について、大学にも確認しました。こちらの調査が令和4年度の結果となっておりますが、この令和4年度には、ちょうど一番規模の大きい第一学食が休業していた時期でした。令和5年4月1日から営業を再開しておりますので、その辺の影響がこの結果に結びついているんじゃないかというようなお話でした。

山田伸幸委員 薬学部の中にできた食堂がありますよね。あそこは外部にも公開しているとお聞きしたことがあるんですけど、実際にそのような営業になっているんでしょうか。

大坪企画課主幹 学食については、外部の方が来られても食べられるような運用になっております。

伊場勇委員 アンケートは全学生を対象にということなんですけど、何パーセントの方が回答されたのか教えてください。

大坪企画課主幹 令和4年度の調査に関しましては、12.9%です。

伊場勇委員 このアンケートの中で改善が必要と思うものについては、学校内

のことだろうなと思うんですけど、例えば学校外の娯楽施設のことだったり交通面のことだったりといったアンケートはされていないんですか。

大坪企画課主幹 各年度のアンケート調査の最後に自由記載欄を設けられておりますので、その辺でそういった回答があるかもしれません。今は手元にありませんので、はっきりとはお答えできませんが、そういった自由記載欄で表れているかもしれません。

吉永美子委員 これは令和4年度ですけど、目的・内容のところに「毎年度アンケート調査を実施しており」と書いてあるってことは、令和5年度はもう終わったということですね。その分析はどうされていますか。

大坪企画課主幹 こちらが令和5年度の学生生活についてということですから、前年度のことなので、今まさに4月から在校生について調査されているところです。卒業生は2月、3月に既に行っておられるんですが、在校生については翌年度に実施されておりますので、今まさにアンケート調査をされているというところです。

吉永美子委員 そうすると、毎年度することの意味は、前年度と比べてここは改善されたよね、ここは逆に低くなったよねといったように、アンケートを分析したとして、ステップはどのようにしていかれるんですか。

大坪企画課主幹 このアンケート調査を基に学内で検討されています。先ほどの食堂の件もそうですし、大学でできることに取り組んでいき、反映されているとお伺いしております。

大井淳一郎委員長 このアンケートの中身を見ますと、どちらかというと大学がやることというか大学運営なので、これを受けて大学が改善していかれると思うんですけど、市との関わりの中で、大学は市に対して、こういうところを改善してほしいというような意向があると思います。その

辺の把握というか調査はこれからしていくということも含めて、現状、何かお考えがありますか。

大坪企画課主幹 予算が必要なものに関しては、予算要求時に大学と元の大学推進室と協議させていただいております。それ以外のものについて、今のところ、大学からこのようにというなお話はないところではあるんですが、今後こういったアンケートの中身を反映して、市と大学とが連携できるようなものがあれば検討していきたいと考えております。

大井淳一郎委員長 学生の意向を把握する上で、大学が学生にこれらの項目について聞いていると思うんです。私が聞きたいのは、市が大学を通じてになるかもしれませんが、直接、私たちのテーマの一つに挙がっている公共交通で困っていたり、何か不便に感じているものがあつたりなかったりとかを把握できているのかなと。今回、上がっているテーマでもあるんですけども、皆さんがその現状を把握されているのかどうかってことです。

大谷企画課参事兼大学連携室長 私ども旧大学推進室の中におきましては、学生の意見を直接お聞きしてはおりません。大学との協議になるとは思いますが、このたびお示ししております大学生の皆さんに行ったアンケート調査の中で、市に対してではないですが、学外に対してこういった希望とかありませんかというような項目を設け、また、個別記載の中では、公共交通機関とか、よく出てきたのが街路灯を欲しいとかということとかもありましたので、そういったものを大学と連携する中で、これは市が取り組むべきであろうというものであれば、検討してまいりたいとは考えております。

山田伸幸委員 一つ気になっているのが、大学生が住むアパートが足りているのかどうかです。かなりの人数が宇部市に住居を構えているというようなこともお聞きしていたんです。周辺にいっぱい建ってはいるんですけ

れど、足りているのでしょうか。何か声が出ているのでしょうか。

大坪企画課主幹 大学のアンケートにも特に挙がってきてはいないようで、大学からも、足りていないというようなお話はありませんでした。

伊場勇委員 市内に住んでいる学生は何パーセントですか。割合が分かりますか。

大井淳一郎委員長 住民票を置いているという意味ですか。（「住民票を置いていない人もいる」と呼ぶ者あり）その辺りの状況を。市内に学生がどれぐらい住んでいるか。

大坪企画課主幹 市内に住まれている方に関して、「住まいる奨励金」が恐らく対象となっているところでありますけど、資料がありません。申し訳ありません。

大井淳一郎委員長 これはこちらで奨励金の関係で調査して、住民票を置いているのは多分それで把握できます。ただ、言われるように住民票はないけど、実際には市内に住んでいることや住んでいないこともあるからね。そこが分かるかな。調べてから、また、何らかの形で報告してください。

山田伸幸委員 以前、竜王山におったら、沖縄から来られたという保護者の方がいらっしゃったんですね。「大学に行かれることで困ったことはありませんでしたか」ってお聞きしたんですよ。そうしたら、大学までの道筋が難しい」というように、ずばっと言われたんです。というのも、厚狭駅に着いてから、どうやって行ったらいいんだろうかと。「事前にも調べたけれど、いざバスに乗ろうと思ってもなかなかないし、大学までたどり着くのもなかなか大変だったんですよ」と言われました。そういうことを何か聞いておられないですか。

大坪企画課主幹 その件に関しては、こちらに何かの情報は入ってきておりません。

笹木慶之委員 先ほど本学の特徴・魅力ということの中の回答なんですが、学費の安さ、奨学金の充実、面倒見が良いということになっているんですが、逆に読めば、悪いということなんですよ。特徴的には悪いということですよ。この辺について何かのあれがあるんですかね。というのが、例えば、学費の安さというのは、公立大学の学費は一定的なものがありますから、何をもって調べたのかなと思うんですけど、どうなんでしょう。

大谷企画課参事兼大学連携室長 すみません。理由につきましては把握しておりませんので、回答のしようがないのですが、2ページを御覧いただきましても高い数字——先ほどの学食、売店の充実というところで、ここが魅力としてそれほどないということで、改善してほしいということなんでしょうが、これでも14%程度ということで、30%とか40%とかという非常に高い数字でもありません。笹木委員がおっしゃられた学費の安さとか奨学金の充実とか面倒見が良いとかが項目として挙がっておりますが、それでも4%程度です。これを改善していく必要はあるかと思いますが、ある程度許容の範囲の数字かなとは認識しております。

大井淳一郎委員長 資料4の中でよろしいですか。（「はい」と呼ぶ者あり）では、次に行きましょう。資料5についてお願いします。

工藤企画課長 それでは、資料5について御説明させていただきます。理科大との連携事業につきましては、毎年度、市から大学にお願いしたいこと、大学から市にお願いしたいことを双方取りまとめの上で依頼し、協力しながら取り組んでいる状況にあります。令和6年度に予定している取組につきまして、資料5に整理しておりますので御覧ください。事業の性質ごとに、「まちづくりに参画してもらう連携」、「学生支援のた

めの連携」、「市の会議体等への委員参加を通じた連携」、「大学が持たれる知識や経験を活かした連携」といった四つに分類してみました。約60事業ありますので、事業ごとの細かな説明は省かせていただき、大枠のくくりで御説明します。まちづくりへの参画とした27事業につきましては、イベント開催時における当日の運営支援等が主な内容になりますが、中には日常的な活動や事業の検討段階に参画いただいている取組もあります。2番の消防団活動の活性化事業では、地域の消防団に現在16名の学生が加入されており、防災意識を育みながら消防団活動に取り組んでいただいています。また、3番のDX協創プラットフォーム形成事業では、本市がどのような方向性でスマートシティに向けた取組を進めていくべきかについて、課題点の洗い出しやその対策など、市の職員や商工会議所青年部の委員などと一緒にアイデアを出し、今後におけるデジタルを生かしたまちづくりについて検討していただきました。学生支援としましては、継続して取り組んでいます住まいる奨励金事業と、市外の学生さん等の転入に伴う支援として、住民異動届の出張窓口を3月、4月には設置して、届出の簡略化及び利便性の向上を図っています。会議等への委員の就任については、連携事業として全部で16の会議体へ御参加いただいております、いずれの場合においても貴重な御意見等を賜っているところです。知の拠点である大学が持つ知識や経験を生かしてもらう事業といたしましては、各種講座における講師としての登壇であったり、アンケート結果の集計や分析であったり、また、新しいところでは、プログラミング教室の実施であったりなど、教育分野における理系的なアプローチで支援していただいているところです。このほか、公式に連携事業と銘打って取り組んではないものの、担当課と大学が協力して進めている取組もあろうかと思います。市としては、公立大学が立地する強みを充分引き出していけるよう、また、大学側にも市と連携することがより良い経験につながるよう、引き続き、連携体制の維持に努めてまいります。

大井淳一郎委員長 資料5について説明していただきました。これについて皆

さんから、質疑があればどうぞ。

吉永美子委員 いよいよ4月からAスクエアがオープンしたわけですが、そこには66名の学生が住んでおられます。こういった連携事業として、新規にAスクエアに関連したものが始まる予定はあるのでしょうか。

和西企画部長 大学において、地域学の先生である中村先生を中心に、2年前から学生寮を活用したまちづくり検討というのが始まっておりまして、昨年12月に6名の学生の発表がありました。今そのプランを何とか具現化しようということで、市の担当課と一緒に協賛を始めておるところです。具体的には、できるかできないかはちょっと分からないんですけど、進捗しているのが、ウォーキング大会みたいなものをAスクエアにある学生寮を中心にスタートさせて、須恵地域一帯を回ろうかというアイデアがあります。学生が活性化協議会の中で発表したアイデアなんですけど、それを市の担当課がいろいろ一緒にあって、何とか具現化できないかと話合いも始まってきておりますので、今から先、そのような形で進めていくような、こういうのがモデルになって進めていければなとは思っているところです。

吉永美子委員 新規に連携事業が拡充されていくことを期待しています。そんな中で、消防団の活動でも、以前から山口東京理科大学には申し上げているつもりで、ほかの事業でもそうですけど、学生が参加していることがとにかく分かるように、例えばジャンパーとかベストとかを着るといような具体的な取組は進んでおりますか。学生であるという存在をより皆さんに、特に市民に知らしめていくというところでは、進んでおりますでしょうか。

工藤企画課長 イベント中に一目ぱっと見て山口東京理科大学の学生だと分かるような取組が進んでいるかということ、まだこれからの課題だろうとは思いますが、例えば、うちの課で担当するような会議の委員を募集する

ときにも、若い方の意見を聞きたいということで、特別に山口東京理科大学の学生を何名ほどか募集するような取組も近年になって行っておりますので、そういった意識の醸成は進んでおるものと思っております。

吉永美子委員 意識の醸成ももちろん大事なんだけど、特に市民の前に出るようなときは、学生が一緒になって地域のまちづくりに頑張っていたいているという姿を知らしめていくという取組を市が推し進めてほしいと思っているのでお聞きしておりますが、いかがですか。

工藤企画課長 どういった形が望ましいかということも含めて、今後しっかり検討させていただきます。

伊場勇委員 政策提案特別委員会では、住みたい、住み続けたいという、大きなコンセプトがまずはあって、山口東京理科大学をどう使おうかという話で、市においては、小中学校の管轄は教育委員会なので、そこと大学がどのように連携しているかを知りたかったんですよ。今日いろいろ見ると、取組的にはすごい何かいろいろやっているんだなと改めて思ったんですが、一つ少し気になったのが、スタディルームの学習支援というのが本山地域で59番目にあります。これは学生が本山地域で塾のようなことか何かをしているのかなと思うんですが、学生側から発信したものなのか、交流センターか何かが発したのか。その辺を分かる範囲でお願いします。

工藤企画課長 委員がおっしゃられたことは、本山地域交流センター発といいますか、依頼を大学に行うという形で取り組んでおるものです。主には夏休み等の長期休暇のときと聞いていますけれども、実習室のようところで、学生が、例えば1日のうちの1時間から2時間、この時間帯はいらっしゃるというような環境をつくりまして、小中学生の勉強の面倒見るといってあれですけど、お兄さん目線で教えてあげるといような時間だと伺っております。

山田伸幸委員 こういったピックアップの事業じゃないかもしれませんが、以前、公共交通を研究されていた先生がおられて、それが地域にも活用できるんじゃないかなというような期待を持っていたんです。今は、そういうことは全然されなくなっただけですか。

工藤企画課長 プログラミングを専門にされている先生がいらっしゃいます。卒業される学生の卒業研究の一環として、そちらの研究室でデマンド型交通システムの構築を行っていただいた経緯がありました。ある程度というか、しっかり進めていただいていたんですが、新型コロナウイルス感染症の間に一旦ストップしておったように聞いておりますので、それ以降について、現在どうなっているかは把握できておりません。

伊場勇委員 学生の事業をよく見てしまうんですけども、やはり本山地区、赤崎地区、小野田地区が結構多いなと思うんです。住んでいるところはそちらが多いから、厚狭地区、埴生地区、厚陽地区は少ないんですか。そういったところはどうお考えですか。

工藤企画課長 おっしゃられたように、大学をより身近に感じられているというのには、やはり地域差があるのだろうと感じてはおります。ただ、厚狭地区でも、中山間地域の事業だったと思いますが、先生と生徒が一緒になって行かれて、地域づくりに携わっていただいている例もありますので、うちとしても今後しっかり市内での周知もしていく中で、大学生に関わっていただけるように、広く進めていければと思っております。

伊場勇委員 いろいろ事業がある中で、どれぐらいの学生に関わっていただいているのかなって思うんです。人数で、例えば50人、100人ぐらいに携わっていただいているようなものがあれば教えていただきたいと思うんですけれども、その辺は分かりますか。

工藤企画課長 人数だけの話になりますと、多いのは8番の認知症サポーター養成講座が該当すると言っているか分かりませんが、たしか百何十名という人数だったと思います。講座を受けていただいて、認知症サポーターとしての意識を醸成していきたいというもので、たくさんの方に関わっていただいております。全ての事業の人数を把握しているわけではないので、それをお答えすることはできませんが、数名程度のものというのも多いですし、回数を年間数回こなすものもありますので、延べ人数で50名程度になるようなものは幾らかあるかと思っております。

山田伸幸委員 12番、中山間地域づくり支援事業は、まさに山陽小野田市の大きな課題の一つではないかなと思います。これに、大学生、教員も加わっております。対象は学生となっているんですけど、文章を読んでも「教員も相まって」となっているんです。具体的には、こういったことをされているのでしょうか。

工藤企画課長 先ほどAスクエアのときの話にもありましたが、川上地域、埴生地域に、中村先生の研究の一環といいますか、携わっていただいているものとなります。先生をはじめ学生にも、人数は分かりませんが、数名程度は毎回行っているもので、令和2年度は埴生地域と津布田地域のPR活動等ということで11回ほどの実施があったように聞いております。それから令和3、4、5年度については、川上地域において、ICTの活用を検討したいという地域の意向を受けて活動していただいております。各年度、4回程度実施していただいたところです。

山田伸幸委員 中山間地域へのICTの活用というのは、具体的にはどういうことをするんですか。

工藤企画課長 すみません、この個別の小っちゃい……（発言する者あり） e

スポーツの検討をしたといったところです。

山田伸幸委員 それと20番のスマホ交流会というのがあります。市でも、スマホ教室を開催すると、すごくたくさんの方が参加されて、しかも、議会カフェの折にも、スマホの使い方が分からないというようなことが意見としてもあって、そういったことがもっとも必要になってきているんじゃないかなと思うんです。市も「それについてはホームページを通じて」とよく言われますよね。ホームページを見るのも今はスマホが一番見やすいですので、その辺でもっともっとういことが活発にされるといいなと思うんですけれど、それに大学生の皆さんが協力してくれるようにはならないんですか。企業がやっておられますよね。その点どうでしょうか。

工藤企画課長 20番の事業のスマホ交流会につきましては、大学の学生に対して依頼を行っているものです。これは地域交流センターからです。ですので、実際に学生が現地に赴かれて、御高齢の方を中心とした参加者と交流を図りながら、スマホの使い方について慣れていただくという事業になっております。令和5年度は2回ほど開催をされておるように伺っております。

中岡英二副委員長 学生もかなりの事業に参加されていると思うんですが、こういう事業について、大学でどのような窓口を通して学生に呼びかけているのでしょうか。

工藤企画課長 大学の中に地域連携の部門がありまして、地域連携の担当課を通じて投げかけていただいている状況です。

中岡英二副委員長 地域連携は職員がやられているんですか、学生が主体でやられているんですか。

工藤企画課長 部門としましては、職員がおる地域連携室といった部署になります。

中岡英二副委員長 だったら、地域でこういうことをやってもらいたいという声をかけるときには、地域連携室が御連絡して、学生を募っていただくという形で今までやってこられているんですか。

工藤企画課長 地域の直接の要求を市が代わりにお伝えしているというところではなくて、市として取り組みたい地域連携の事業をその部署を通じて投げかけを行っているということです。

中岡英二副委員長 地元ということで、本山にもかなり学生が来て、応援していただいております。だから、そういうときに、地域としてお声掛けする場合もありますが、言われたように地域連携室を通していない場合もあると思うんです。今からそうした地域貢献を、学生も学校も大学もしていこうという意思がかなりあると思うんですが、それは地域連携室に連絡を取っていただいて、こういうことをしていただきたいということでもいいんですか、それとも市がやってもらいたいことを地域連携室にお伝えして、そういう事業をやってもらおうということですか。

和西企画部長 企画課に来て7年目になるんですけど、私が来る前は市役所の各部署が大学に連絡しておって、伝達手段が少し混乱していたことがありました。6年前に窓口をお互いにしっかり把握しましょうということを行いました。大学は地域連携室、市は大学に言うんじゃないくて、企画課を1回通した上で大学に伝えていくという、その窓口を固定化することによってお互いの意思疎通を図るような形を取らせていただいています。最後、委員が言われた市の思いなりを伝える、企画課の思いやいろいろな思いはあるんですけど、今のところはそうやって中立ちというか、中継地としての役割を企画課が果たしているというところですよ。

伊場勇委員 先ほど聞いた本山地域交流センターでのスタディールームは、有償かボランティアか、分かりますか。

和西企画部長 本山地域交流センターから大学に行って、大学からも無償で行っていると聞いております。コミュニティ・スクールの関係で、地域資源の活用をしていこうということで、人材も含めて、以前は学生じゃなくて、いろいろな地域の方が学生の面倒を見るという形もありましたが、本山地域交流センターでは、大学を地域資源ということでやり取りを始めているということです。

伊場勇委員 教わった子供もしっかり頭に残っているでしょうし、教えたほうも愛着が湧くだろうなと思って、すばらしい事業だと思うんですけど、地域性があるって、やはり埴生地域と本山地域では山口東京理科大学に関して、学生がいる、学生がいないということもあるし、関係は少し違うところがあるんですよね。そのバランスを何とか均等にするような取組として、どういうことが挙げられますか。

和西企画部長 学生の移動手段の問題がとて大きくて、自分たちで車を持っていらっしゃらない方々が多いので、本山、赤崎、小野田地区のほうにそういうやり取りというのが集中しているのは事実です。先ほど川上地区の話があったんですが、先生が車で連れていくようになりますので、やはり移動手段をどう解決するかが問題になるのかなと思います。

大井淳一郎委員長 よろしいですか。（「はい」と呼ぶ者あり）それでは、付議事項1については、以上とします。ここで暫時休憩します。

午後2時32分 休憩

午後2時45分 再開

大井淳一郎委員長 それでは、委員会を再開します。付議事項２、今後の進め方についてです。まず確認しておきたいのは、あくまでも山陽小野田市に住みたい、住み続けたいと思うようなまちにするということがあるべき姿ということで、それを実現するための手段として、先ほどやりました山口東京理科大学との連携、次世代育成、公共交通ということになっております。ですから、今後はこの三つのテーマに沿って話を進めていきたいと思います。もちろん、それ以外にも、子育て支援とか魅力発信とか様々なテーマがありますけれども、先ほど挙げました三つのテーマに従って８、９月の政策提言提出に向けて動きたいと思いますので、御協力をお願いしたいと思います。今後の進め方、予定なんですけれども、今日は実現しませんでした、公共交通の現状について、担当課から説明を受けようと思っております。それに基づいて、皆さんから今日のように質疑していただくことになります。次世代の育成については、まだ下話をしておりませんので、そこら辺も行いたいと思っております。跡地活用については時期がいつになるか分かりませんが、これもどこかで現状について確認したいと思っております。その上で、どういう形になるか分かりませんが、私たちが各種団体との意見交換とか先進地の視察とかをしていき、だんだん提言に向けて進めていきたいと思っております。そのような形で進めていこうと思いますが、皆さん、御意見等がありましたらお伺いしたいと思います。

伊場勇委員 今日、山口東京理科大学の担当課に来ていただいて現状は分かりましたが、数字としてもう少し頂きたいところもあるので、例えばアンケートしたときの自由記述欄の内容だったり、市内の学生が住まれている人数の割合だったりとかは、資料として頂きたいと思います。それで、市内の状況や公共交通についても聞いた中で、違うところを視察したり我々の肌で感じたりする必要があるかなと思うので、正副委員長で視察先をピックアップしていただいて、提示していただきたいと思います。

山田伸幸委員　今の件ですけど、こういったまちづくりを目指すのかというのがある程度ないと、なかなか絞り切れないと思うんですね。子育て支援といっても、これはもう日本全国どこでもやっていることで、その中で何をどうピックアップするのか。山陽小野田市と同じような悩みを持ち、そしてそれを解決したようなところでないと、なかなか難しいんじゃないかなと思います。公共交通にしても、全然違うようなところ、例えば山間部ではなかなか当てはまらないと思うんです。ある一定の都市形成の中で、この土地活用にあったようなものでないとなかなか難しいと思うので、選定については難しいかと思いますが、そういったことを念頭にして研究を進めていくべきじゃないかと思います。

大井淳一郎委員長　山田委員がおっしゃるとおり、あくまでも視察に行こうと思うならば、参考にならないといけないので、余りにもかけ離れたところに行っても仕方ないとは思いますが、行くことがありきではないので、そこは皆さんと相談しながら、行くか行かないかも含めて、少し慎重に考えたいと思います。また、公共交通については専門家の先生がいらっしゃいますので、そういう方をお呼びして、山陽小野田市においてどういったことをすればよりよくなるかをお伺いできる機会を設けられたらと思っております。

山田伸幸委員　それについて言えば、例えばコンパクトシティーの専門家の先生もおられて、私も少し学んできたんですけど、山陽小野田市の方向性が少し違っているなと感じたんです。だから、本当に地域特性に合ったアドバイスを受けられるような方がいいんじゃないかなと思います。

大井淳一郎委員長　人選につきましても、本市の現状をよく知っておられる方がいいだろうと思っておりますので、その辺りも検討しながらお呼びしたいと思っております。

中岡英二副委員長　今、言われたように、コンパクトシティーと交通政策は物

すごく関連していると思うんです。だから、交通施策だけではなく、コンパクトシティーになるにはどうした交通施策がいいのか、交通施策の中でも高齢者の福祉バスというのも重要な交通政策の一つだと思うんですよ。交通網をつくるだけが交通政策じゃないと思います。だから、コンパクトシティーを目指すんならそうした交通政策とまちづくりを同時進行で——行政の方も言われていたんですけど、小野田駅前のバス停が4か所ぐらいに分かれるじゃないですか。まちづくりとしては、1か所にまとめて、小野田駅を降りた人が1か所でどこに行くのかが分かるように、行政の中でも交通施策とまちづくりとシティーセールスとで分かれているのを——政策提案というのが、高齢者福祉にしてもそうだと思うんですが、横串で全体的なものを見て、交通政策をやっていくのがやはりベストじゃないかなと思います。（発言する者あり）すみません、私の思いが少し入ってしまったんですが、私も、小野田駅前は、バス停は1か所にするのがまちづくりの一つじゃないかと思っていますので、そういう意見を言いました。

大井淳一郎委員長　意見として受け承ります。そういった意見も含めて、現状をお伺いして、山陽小野田市にとって何がベストというかベターなのかを考えていきたいと思っています。

山田伸幸委員　以前は民生福祉常任委員会の所管だったんですけど、全体でということで、病院の再生について、専門の方に来ていただいてというのがありました。ただ、残念なのは、単発的だったんです。山陽小野田市に目を少し向けていただいて、まちの在り方についてきちんと意見を言い続けていただけるような方がいいんじゃないかなと思います。もしもあるならば、単発ではなくて、継続的であることにこしたことはないと思っています。まず、僕の中で誰を呼ぶかが決まっているわけではないんですけども、人選については、皆さんと相談しながら検討していきたいと思っています。

笹木慶之委員 今日の大学連携室に対する質疑なんだけど、これは山口東京理科大学に限定するものじゃないんでしょ。なぜ、こだわるのかと思うんだけど、山口東京理科大学はそれ自体で考えるんですか。（発言する者あり）いや、だから、まちづくりについて考える話の中で、いろいろ出ているから、あえて言うんだけど、どの辺をどう捉えて発言したらいいのかというところが見えんわけ。委員長が言われるのがね。だから、我々はどのようなテーマでどのように捉えていく話をするべきなのかを聞いているわけ。それは、どう理解すればいいのかな。

大井淳一郎委員長 先ほど述べましたように、山陽小野田市に住みたい、住み続けたいと思ってもらうためにどうしたらいいかと考えたときに、三つのテーマを挙げ、前々回の委員会で確認しました。その中で、笹木委員の言われた山口東京理科大学との連携、次世代の育成、公共交通の充実をテーマにして進めていこうと考えております。山口東京理科大学との連携については、私たちは大学経営に直接立ち入るわけではありませんが、市と大学とが連携を強めることで、大学生にとって、山陽小野田市を身近に思ってもらえるような仕組みづくりをしていくことによって、最終的には山陽小野田市に住み続けるという形に持っていきたい。そういった提言をしていきたいと思っております。

笹木慶之委員 申し上げたいことは、その一つ一つの分析はもちろんのことですが、こういう事案をつくって事項を解決しようと思ったら、点の部分から線で結んで、そして面にするというようにしないと、いろいろな要素がかみ合っているんでトータル的に判断できないと思うんです。それがかみ合わせながら、一番大きなウエートのものになっているんだということも踏まえて話をしないと、ただ単品をそろえても、なかなかまとめられないんじゃないかと思うんです。例えば道路交通網の問題にしても一緒なんだけど、高齢者の一部が、ある箇所に移動したいという話をしたとき、どうしようもならんのよね。だから、それは、どのようにすれば、点と点を線で結びつけて、そして面につなぐのか。それが、地域

に住みたいというところにつながるんじゃないかと思うんですよね。だけど、実際にいろいろな本を読むんだけど、なかなか難しい問題がたくさんあると思いますので、そういった姿勢に立って、いろいろな形で分析すべきじゃないかなと思ったわけです。たまたま、先ほど山口東京理科大学の話が出て思ったんだけど、学生から「奨学金が安い」とか「学費が安い」とかというような話がアンケートで出ている中、それを非難するわけじゃないんだけど、アンケートをするときには、よく考えて、何の目的のためにするのかということを考えるべきじゃないかなと思ったわけ。ほかのことはあえて踏み込みませんでしたが、やっぱり今後については、そういう形でいろいろ議論を深めたほうがいいんじゃないかなと思っているわけです。あえて申し上げておきます。

大井淳一郎委員長 私たちが政策をつくっていくというのは、笹木委員が言われるように、なかなか大変なことではありますけれども、特別委員会を設置しましたので、様々な知見を活用しながら、皆さんと協力しながら提言をまとめていきたいと思いますし、それが完璧とか全て完了とかではなくて、それをスタートにして、よりよいまちにするために継続的に私たちにおいて調査していかなきゃいけないと思っております。委員会は、1年ではなくて2年ありますので、1年目に出した提言をどう生かしていくかは、2年目でやっていくことだと思っております。よろしくお願いします。

中岡英二副委員長 まずは、大学生との連携ということで、生活に関わるアンケートをして、山口東京理科大学からアルバイトに行くのに、日頃は自転車で行くけど、雨が降った日に帰りのバスがないとか、JRで行きたいのにJRの——今は学生がバスに無料で乗れますよね。だから、そういうJRの利用も考えてほしいという御意見もあるかもしれませんよ。そういう御意見を、アンケートを聞きながらどこが不便なのか、地域の方でもそう、交通施策にしたって、病院への行きはバスがあるけど、帰りのバスがないとかという細かい意見が出てくると思うんですよ。それ

を交通施策に生かしていくことが大事だと思うし、そういうのができていったら、高齢者に対する利便性も上げていくというか、乗りやすい施策も考えていくというか——まずは学生にアンケートして連携を深めていくのが一番かなと思っています。委員長が言われたとおりです。

大井淳一郎委員長 今日出たアンケートだけではなかなか難しいと思いますが、前から言っておりますように山口東京理科大学の学生さんと意見交換をする中で、本市で困っている状況、公共交通が主になってくると思いますので、そういったことを聞くのも一つの手法だと思っております。

笹木慶之委員 もう1点申し上げておきますが、美祢線の問題と小野田線の問題は、公共交通機関の大きな問題なんですよ。これが今、ただただ放置されておる状態の中で、次の検討を続けるということは、やはりなかなか難しいと。動く前提で物事を考えるのか、なくなることを前提と取るのか。美祢の人たちが本市の学校に行くのに、どのルートとするかといったって、美祢線がないわけですよ。バスがあるかといったらバスもないわけ。全部個人なんです。保護者の送り迎えが原則になっているような感じみたいなんですよ。もちろん一部は代替バスが動いているんだけど、しかし、なかなか利用が進まんような状態になっているから、もともとある公共交通網の期間のそれについては、それなりのものをきちんと押さえた上で話していかないといけないかなと。もちろん結論的なことは言えないけど、そういう状況があることを踏まえた議論にしてほしいなと思います。

大井淳一郎委員長 そのために、私たちは本市の現状を知る上で、公共交通計画の勉強を通して、それから執行部から現状を聞くという形で、その中で笹木委員が言われたように、美祢線や小野田線についてどうするかは、委員会の中でも話し合っていかなきゃいけないとは思っております。よろしいですか。（うなづく者あり）今後の進め方については、皆さんの御意見をお伺いしながら進めていきたいと思っています。3のその他もよろ

しいですね。（うなずく者あり）それでは、以上をもちまして、政策提案特別委員会を閉じます。お疲れさまでした。

午後 3 時 3 分 散会

令和 6 年（2024 年） 4 月 1 5 日

政策提案特別委員長 大 井 淳一郎